

岩手医科大学歯学会第37回総会抄録

日時：平成23年12月3日（土） 午後1時より

会場：岩手医科大学歯学部第四講義室

特別講演 I

知ってる？知らない？放射線の話

東海林 理

岩手医科大学歯学部総合歯科学講座
歯科放射線学分野

世界で唯一原子爆弾が投下された国である日本に住む我々は、「ひばく」という言葉にとっても敏感です。2011年3月11日の東日本大震災により、福島第一原子力発電所事故が引き起こされて以来、放射線に関する情報があらゆるメディアから流されています。また最近では民家の地下から放射性物質が発見されたり、スーパーマーケットの駐車場で高い値の放射線量が計測され、日本全国で放射線、放射能、ベクレル、シーベルト、放射性セシウム、放射性ヨードなどの用語が錯綜しています。しかしマスコミで毎日伝えられている放射線に関する「用語」や「数値」についてどれ位理解がされているでしょうか？

Röntgen がエックス線を発見して以来、「レントゲンなくして医学なし」とまでいわれその言葉の意味は21世紀の現在でも強く生きています。歯や硬組織疾患を扱っている我々歯科医師は、特にその恩恵を受けているといえます。しかし時として患者さんから、「歯科医院でたくさんエックス線写真を撮られたのに大丈夫ですか？」などの相談を受けることがあり、そのような疑問についてわかりやすく説明する必要に迫られます。

そこで、今回は放射線についてのベーシックな事項や、現在新聞紙面を賑わせている用語、インフォームドコンセントに必要な数値について、放射線の専門家の立場で解説したいと思います。

特別講演 II

口唇口蓋裂の乳幼児から成人までの一貫治療

金野 吉晃

岩手医科大学歯学部口腔保健育成学講座
歯科矯正学分野

口唇・口蓋裂は日本における先天異常発生頻度の第4位であり、500人に一人の割合で出生するとされる。

本学歯科医療センター矯正歯科では、本学の口腔外科、形成外科、NICU、小児科、開業医、県内の各病院から、口唇・口蓋裂を有する乳幼児の紹介を受けている。平成22年は、紹介された乳児新患が42名を数え、例年になく多かった。

我々の基本的方針は、乳幼児から成人までの一貫した治療体制であり、各成長段階における患者と家族のQOLをサポートし、成人期には社会生活への不安が無い状態をつくることにある。そのためには乳児期からの治療が重要であると考え、すなわち患者家族とのラポール形成を図り、哺乳障害を解消し（できれば完全な母乳の直接授乳へ）、術前顎矯正（PNAM: pre-surgical naso-alveolar molding）によって形成手術を助け、それに続く長期間の治療にスムーズにつなげて行く事である。しかし、問診時、生後三か月間の貴重な時期についての医療知識、哺乳指導の欠如、誤謬が散見されるのは遺憾な事である。

今回の講演では、乳幼児期の治療、食生活や言語など機能的発達に即した関連疾患への予防管理、成長期に併せて施行される各種手術、それに関わる矯正歯科医の役割、そして補綴への橋渡しといった問題と症例を提示する。

特にPNAMは、日本では多くの外科医の支持があり導入する医療機関が増加している。乳

児期の形成手術はその後の顎顔面成長と機能発達に大きな影響があり、それに先立つPNAMは術式へ影響する。なぜならPNAMが奏功すれば、GPP (gingivo-periostoplasty) が可能となり、学童期の顎裂部骨移植をせずに済む可能性があるからである。我々は成果がまとめられる約十年後の長期的なエビデンスを蓄積すべく努力している。

一般演題

演題1. 患者がわかる歯科用語についての調査

○峯田 武典, 寺内 貴廣, 深澤 翔太,
村上 智基

岩手医科大学歯学部5年

目的:本研究は、医療従事者が一般の方には認知されていないと考えている歯科用語が、実際に認知されていないかどうかを検証するために行った。

方法:岩手医科大学歯科医療センターにおいて、216名の外来患者と117名の同施設で診療を行う歯科医師、臨床実習を行う歯科学学生61名を対象にアンケート調査を行った。

40項目の歯科用語に対し、患者には知っているかを、歯科医師と歯科学学生については一般の人が知っていると思うかどうかを質問した。対象のグループの間の解答の分布の差はカイ二乗検定で検討した。

結果:40単語中、最も患者が知っているとしたのは「歯周病」(99.5%)で、「乳歯」(99.0%)、「抜歯」(97.7%)の順であった。知っているとした患者が最も少なかったのは「TEK」(10.4%)で、次いで「仮封」(10.8%)、「クラスプ」(10.9%)であった。「歯垢」と「プラーク」、「糸切り歯」と「犬歯」の2つの別の言葉が同じ意味を表す2組についての比較では、「歯垢」(97.2%)が「プラーク」(85.3%)よりもよく知られている一方、「糸切り歯」と「犬歯」は患者には同じ割合で知られていた(94.4%)。カイ二乗検定により40の用語のうち22の用語で統計的に有意な差が確認された。

歯科医師や歯科学学生が患者の認知度が高いと考えていた「齶蝕」や「スケーリング」は患者

のほとんどが知らなかったのに対して、「口腔」や「口角」は歯科医師や歯科学学生の想像以上によく知られていた。

考察:口腔保健用語が多く多くの患者に知られていたことを考えると、歯の健康に対する取り組みや、審美性に関する意識の向上が認知率に大きくかかわっていると考えられる。また言葉の置き換えが認知度の差違の要因の一つとして考えられる。

結論:歯科医師・歯科学学生が専門的であると思っている歯科用語の中には、多くの患者が認知しているものもあることが示された。

今後、歯科医療を国民により理解していただくには、歯科用語のさらなる認知度の向上の検討が必要と考える。

演題2. 侵襲性歯周炎罹患患者における歯周組織再生の一例

○藤本 淳, 藤本 梓, 阿部 仰一*,
大川 義人,**佐々木大輔,**村井 治,**
八重柏 隆**

盛岡市開業, 茨城県笠間市開業*, 岩手医科大学歯学部口腔機能保存学講座歯周・歯内治療学分野**

歯周組織再生療法の適応は、垂直性骨欠損で骨壁数が多い症例とされている。今回、侵襲性歯周炎罹患患者の抜歯適応歯が、歯周組織再生療法の一つであるエムドゲイン® (EMD) を用いて保存可能となった症例を経験したので報告する。患者は34歳の女性。主訴は歯肉の疼痛であった。初診時、全顎的に4-8mmの歯周ポケット(PD)を認め、PD4mm以上の部位が68.5%、プロービング時の出血部位が67.9%、初発年齢、骨吸収状態より侵襲性歯周炎と診断した。本症例では歯周基本治療終了後の歯周外科処置において、抜歯適応歯にEMDを適用した。その結果、エックス線写真で垂直性骨欠損部に著しい歯槽骨再生を認めた。今回の症例から、侵襲性歯周炎患者における歯槽骨再生には、年齢等の要因が深く関与していると考えられた。